

「スペイン語教師としての私達の実践について振り返る」

担当者: 小川雅美

「そもそも、なぜ?—より根本的な問いへ—」

当たり前だと思ってきたこと、もしくは思われているようなことが何故なのか。参加者それぞれが、スペイン語教師としての職業実践の中で疑問に思いながら、あまり話題になってこなかったようなことを述べる。

使用した論文:

Escandón, Arturo (2001). "Límites de la metodología en la descripción, análisis y teorización de la enseñanza/aprendizaje de lenguas extranjeras", CUADERNOS CANELA XIII, pp. 87-98. 小松晶子訳 (2002) 「外国語教育と学習の記述・分析・理論化 における方法論の限界」『関西大学外国語教育フォーラム』創刊号 pp. 17-29.

今回は、論文が難解であることと、論文を、根本的な問いを引き出すきっかけとして使用したことから、先に参加者から「より根本的な問い」を出してもらい、その後で、時間の許す範囲で、論文の概要を発表者が説明しました。論文概要については、別ファイルをご参照ください。なお、翻訳の日本語は、発表者が一部修正しています。

論文の主な主張

1. 大学における外国語 (スペイン語) 教授・学習の営みを、狭義の教授メソッドを超えた学際的な視野から、根本的に考え直す必要がある。
2. メソッドには背景となる教育志向があり、これを無視してメソッドだけ用いても、有効な教授活動はできない。
3. 応用言語学は、外国語教育の今後の指針を考えるのに有効な学際的分野である。
4. 実践に際しては、行為中の内省により、現実の制約の中で理論的本原則が都度曲げられてしまうこともある。しかし、そのことは原則の消失を意味しない。
5. 行為について内省し、実践の不明確な側面を共通の言語によって打破するような分析空間 (「批判的内省」) が必要である。

参加者から出た素朴な疑問

バーンステイン (論文スペイン語版 pp.88-89) による、「知識の有効性を証明するシステム」と、その 3 つのサブシステム (メッセージシステム) に、今回の参加者から出た「素朴な疑問」をあてはめつつ、全体を図式化してみました。(次ページ参照)

制度としての大学教育

クラスサイズが大きすぎ。

「リレー式の授業」が、問題視されているのに減らないのは何故？

なぜ経済の用語が大学に入り込み、効率が求められ、就職予備校のような存在になり下がってしまったのか。

第2外国語が必修選択科目である必然性はどこから来るのか？

学科、語科内で指針がない。もしくは画一的すぎ。

(a)カリキュラム

(有効な知識とみなされるものを定める)

到達目標が文法事項の習得に置かれ、スキル（できること）に置かれていないことが疑問。

和書の初級文法の記述は何に基づいているのか？コミュニケーション能力にどう関わっているのか。

テキストブックとはどうあるべきか。どう使うか。

日本人教師とネイティブ教師のコラボレーションが困難である現実について再考が必要。

教育活動

(「知識の有効性」をめぐって)

成績評価の基準がパーセンテージを基準とすることに、学習の観点から根拠があるのか？

(b)教育(pedagofa)

(知識の有効な伝達方法とみなされるものを定める)

学生と対話的に構築する授業と、既存の知識を伝授する授業とどちらが望ましいか。

淡々とした授業と、「人間的触れ合い」が前面に出た授業とど

外国語学習を活発に、学生が主体的な参加に臨めるような実践的方法論の共有について (提案：フィールドワーク型の活動の導入)

ペアワークをどう行えばよいか (ペアワークは必要か、ということも含め)

授業を盛り上げるにはどうしたらよいか。

(c) 評価

(教育を受ける者が知識を「有効に理解した」とみなされるものを定める)

形式的な FD はあっても、
真に授業方法を互いに見直
そうという雰囲気がない

なぜ多くの学生は小さい声しか出せないのか？

実践者（教師）としての自

生徒はクライアントであるという意識は必要か。

「教壇の上で『プロである』ことに徹するために、se me ocurre…的な疑問はあえて封じてきたことに気付いた。その思考停止状態の自分自身が疑問」

「そもそも…」番外編

TADESKA の活動後、参加者のうち 3 人の雑談で出た話題

「大学院を出たら、教師として働くことが想定されるのに、そのための *formación* がないのはなぜ?」「自分の専門知識と、スペイン語教師としてしての知識は別であるにも関わらず、教師としての職能を学ばなくても就業できてしまう現状をどう考える?」「TADESKA がそれを学ぶ場だと思っていたが」「教師ほど自分が客観的に見えない仕事はないよね」

最後に

今回のテーマは、発表者が常々思っていた「教師としての自分が持つ後ろめたさ」「『教育』という言葉を発する時の気持ちの悪さ」に端を発するものでした。発表者は教師としての仕事を一旦最小限にまで減らし、今は、スペイン語からも距離を置いて、学習と教育、経験と思考、コミュニケーションと言語について、実践の観点から考察しています。研究と実践とを分ける必要はなく、むしろ、経験に根差した素朴で頭を離れない疑問こそが、独創的な探求のテーマになり、そこから借り物ではない、現場に根差した有益な方法論が生まれてくるのではないのでしょうか。既存の教授法の本や論文に書かれていない疑問も、書かれているのに現場で話題にならないような疑問も、TADESKA の中で言語化することができたと思います。

参考

以下は、出席者から出た素朴な疑問とそれについてのコメントです。スペイン語教師になって間もない参加者、非常勤のベテラン、専任の教師等、それぞれのポジションや、また専門分野の見地から、さまざまな疑問や、それについてのコメントが出ました。

Aさん

1. 生徒はクライアントであるという意識は必要か? (先日の学生アンケートで様々な要求を受け、それをどう実現していくべきか困惑した)

2. 第2、第3言語としてスペイン語を学ぶ学生への授業実施について。最近、第Ⅲ外国語としてスペイン語を学んでいる専門学校の学生さんが少々つまらなそうだ。授業をどう盛り上げていけばよいか?

3. ペアワークをどう行うか。(短大でペアワークを嫌う学生さんがいる)

←そもそも、ペアワークをする必要があるのか。特に、教師も学生も日本人の場合、会話をさせてもすぐ日本語になってしまう。このことは防ぎようがないのでは?

←1時間目にペアワークを入れるとクラスが活気づく

←クラスの状況、能力、テーマに即して臨機応変に見ていく必要がある

Bさん

吉本隆明は「教師は淡々と授業をすればいい。うだうだ、物事を説こうとする教師がいるが、そんなものは必要ない」と言う。だが、淡々と授業をするだけでいいのか? 授業を通して「人間

的触れ合い（コミュニケーション？）は必要ないのか？吉本氏は、これは淡々と授業をするだけで通じると言っている。

ただ、たしかに、自分がよいと思った授業（心に残っている授業）は淡々としていた授業。だからといって、「人間的触れ合い」を前面に出した授業がどんなものか、イメージがあるわけではない。

Cさん

学生との対話的な（彼らの要望などを聞き入れた）授業と、アカデミックな（カリキュラムや目標到達点）を重視した授業展開と、どちらが有効、有意義といえるか。

Dさん

1. スペイン語のみならず、外国語学習を活発に、学生が主体的な参加に臨めるような実践的方法論の共有について。

2. （上記と関連して）最近、諸分野間、学際的研究で議論になっているフィールドワーク型の教育法が、各教師の特性を活かしながら導入できないだろうか？（各大学のカリキュラム次第ではあるが）

Eさん

1. スペイン語教育、外国語教育以前に、日本の大学教育について深い溜息をついている。なぜ経済の用語が大学に入り込み、効率が求められ、就職予備校のような存在になり下がってしまったのか。なぜ東京都立大学や横浜市立大学のように、外からの新自由主義的な力によって、大学の破壊が許されてしまうのか。

2. （こちらがメインです）

1) 学科、語科内でまるで指針がない。あるとすれば画一的すぎ。

2) クラスサイズが大きすぎ。

3) 形式的なFDはあっても、真に授業方法を互いに見直そうという雰囲気がない。

（授業内容を改善するというのであれば、本来は、大学教育のシステム全体が健全か、というところまで踏み込むべきである。）

Fさん

カリキュラムにおいては、通常、具体的な文法事項（「直説法現在まで」「接続法過去まで」など）が到達目標として教師に示されます。一方、学習者が技能的にどのレベルに達すればよいのかは示されないことが多いようです。例えば、「〇〇」が読める程度、「〇〇」が聴解できる程度、「〇〇」を伝える作文ができる程度、「〇〇」が言える程度、などです。

Gさん

1. 教壇の上で「プロである」ことに徹するために、se me ocurre…的な疑問はあえて封じてきたことに気付きました。疑問を持つと、「教壇の上の自分」がブレるような気がして。その思考停止状態の自分自身が疑問といえは疑問。

2. 細かい疑問(se me está ocurriendo...).テキストブックとはどうあるべきか。どう使うか。

Hさん

1. (Escandón 2002 に言及し) 本当に今のスペイン語教育において教授法が中心課題になっているといえるのか？

2. 特に日本人教師のあいだで多くおこなわれている「リレー式」の授業は、その欠点も指摘されているわりに減っているような感じがしない、というか減らせないのはなぜか？(自分自身が教えていない部分について、学生がどのように習ったのかわからない。)

3. 日本人教師とネイティブ教師のコラボレーションは、その必要性を理解されながらなかなか実現しがたい。(使用教科書が異なると合わせにくい。また、たとえば、ネイティブ教師が洋書(Gente など)を用いる場合、それに合わせた授業を日本人教師は行いにくい。)

←自分の場合、ネイティブとのペアの授業で文法を教えている。ところが、ネイティブによる会話の授業が進まないのも、それぞれの授業の進度の差が開いてくる。開かないように、と言われても、どうしても開いてしまう。

Iさん

1. 教科書(和書)に記載されている初級文法はなぜ同じパターンなのか？あのスタイルの文法は、スペイン語ができるようになることとどう関係があるのか。あのような文法記述はどこから来たのか？

2. スペイン語を含む第2外国語が必修選択科目になっている必要はあるのか。スペイン語を学びたい人だけが学べばよいのでは？(誤解のないように付記するならば、「なくすべきである」と主張しているのではなく、必修科目であることを当然視する姿勢そのものを厳しく問い直すべきではないか、という提案である。)

←第2外国語を学ぶことにより、学生の世界観が広がる。実際に授業の中で、途中から目が開いていく。そのプロセスが大事だと思う。

3. テスト(成績評価)が100点満点であることに、学習の観点から根拠があるのか？

←特にない。130点満点の試験を作って、最終的に100点になるように再計算することもある。

4. なぜ多くの学生は小さい声しか出せないのか？(大きな声で発言すべきである、と主張したいのではない。声が理屈ではなく感情や身体、他者との関係性の問題である所、声がなければ話し言葉は表出しえない所を問い直したい)